





はじめに

私は本学の人権教育研究委員会の委員長をしている八木です。同時に人権教育研究センターという研究機関の所長を兼ねています。

昨日の入学式でお渡しした資料の中に我々の研究センターが発行した「人権教育研究センター報」がありましたね。この中に諸君がこれから受講する人権関連科目、前期、後期あわせて16コマの紹介文を入れておきました。社会福祉学部の介護福祉コース以外の学生さんはすべて2科目4単位、介護福祉コースの方は通年で1科目4単位を受講していただきます。人権関連科目を必修にするということについての是非にはまだ議論があるとは思いますが、昨日の入学式で学長が申しましたように、この大学の教学の柱としては、臨濟禪の精神と同時に反差別と人権伸長の課題を据えている全国的にみてもかなりユニークな大学です。そういうわけで人権関連科目を前、後期あわせて16コマ準備しているというのも実は破天荒なこととして、そんな大学はどこにもありません。このことが示すように、我々は伊達や酔狂で人権問題に

取り組んでいるのではなく、かなり本気にやる気になっているのです。

高校までの間に、そこそこ差別問題とか人権問題とかを学んでこられて、「差別したらいかんでしょ、人権は守られるべきなんでしょ。そんなことは聞き飽きて耳タコよ」というふうに思い、「なんでそれを大学まできてまたやらねばならないのか」というふうに思われる方もいらっしゃるかとは思いますが、我々の教育・研究の水準はそんなところにはありません。人権は守られるべきであるとか、差別をしてはいけないというようなところからは、我々は出発いたしませんし、そういうところに到着いたしません。誤解を恐れずにいえば、我々は、将来はともかく、現段階までにおいて、人間は差別するようにつくりあげられていると考えています。我々が営んでいる社会や集団は、差別をいわば不可避な仕掛け＝装置として、ある意味では必要とさえしているのではないかと、そういうところからしか出発すべきではなかろうというふうに考えているのです。それならば、なにを考えなにをしても無意味ではないのか。決してそういうわけではありません。差別という装置あるいは仕掛けが、

人間や集団にとって不可欠ないし不可避的なもので仮にあったとしても、むしろ、そうであればあるほど、そこから目を背けずに、まともに向かい合っていこうじゃないかと言いたいわけです。あるいは負けてしまうかもしれないけれども、差別に正面から向き合って、たたかっていって、なるべく差別の少ない社会をつくり、なるべく差別を媒介にしないですむような開かれた人間の関係性を模索していこうじゃないか・・・、これが我々の教育や研究の基本的なスタンスだというふうに考えています。ですから、みなさんがこれまでに経験してきたような人権教育とは全く異なるものだということを、私は胸を張って言いたいと思います。是非とも、おもしろがって受講して欲しいと思います。人権問題を考え差別問題とたたかうのは結構おもしろいんだという、そういうところまでいっていただきたいと考えるわけです。すべての学問、研究のベースには人権があるわけで、それを抜いた研究や教育はほとんど意味をなさない、というふうにも言いたいのです。

そういうわけで、本学では新入生オリエンテーションの1コマとして、それもかなり重要な1コマとして、毎

年、人権講演を位置づけています。新入生に対するオリエンテーションのなかに人権講演をセットしている大学も他にはありません。先ほど伊達や酔狂で人権問題に取り組んでいるのではないと申しましたことの意味はそのようなことなのです。

人権教育研究センターは本部棟の4階にありまして、非常に楽しい空間として設定されています。学生、教員、職員が入り乱れています。眉間にシワをよせて堅苦しく人権問題について語りあっていることもあります。それ以外にお茶を飲んだり、酒を飲んだりですね、どちらかというとウマシカバナシに属するようなことにうち興じていることが多い。1回生には敷居が高いらしくて、なかなか姿をあらわしません。決してそういう場ではありません。この大学は残念ながらキャンパスが狭い。そのために学生さんの居場所が少ない。そういうことも考えて、みなさんの憩いの場としても人権研センターを提供しておりますので、時間のあるときに顔を出されると何かいいことがひとつくらいはあるだろうと思います。

今日は、本学で人権関連科目のほかに社会教育関連科目、それから今年発足のCDCの1コマをも担当してい

ただいている吉田智弥先生にお話しいただきます。テーマは「オランウータンと雲古の話」。どういふ話か全然、私にもわからないのですけれども、非常に話のおもしろい先生です。ただ職業病的な早口の先生でありますので、よく耳をすませて聴いていただいたほうがいいと思います。それでは吉田先生をご紹介します。

2002年4月4日

花園大学人権教育研究委員会委員長・人権教育研究センター所長（文学部教授）

八 木 晃 介

オランウータンと雲古の話

吉 田 智 弥

(花園大学非常勤講師)

こんにちは。昨日が入学式で、今日は二日目ですね。大学の先生は難しい話をするのではないか、堅苦しい話をするのではないかと、ちょっと緊張している人がいるかもしれませんが、私はそんな話をするつもりはないので、どうぞ気楽に聞いてください。

今日は年配の私より若い皆さんの方が詳しい、そういう話をします。一つは携帯電話の話。二つ目はマクドナルドの話。三つ目に「探偵ナイトスクープ」の話。最後に「オランウータンと雲古」の話をしようと思います。

オランウータンは片仮名で、読めば分かりますが、「雲古」は何と読むのやろかと戸惑ったのではないですか。辞書にはこんな漢字は載っていません。けれどもインターネットのYahoo ジャパンなどの検索装置に「雲古」を入力してみると、数百件、時には千件以上もヒッ

トします。つまり「雲古」という文字の含まれている情報はかなりポピュラーに流布しているのですが、もちろん当て字で、読み方は「うんこ」です。私自身は開高健(作家)のエッセイでこうした当て字があることを知りました。

が、「入学したばかりのおめでたい場所で、何という話をするのか」と言われるかもしれないので、最後に残しておきます。

●携帯電話が「当たり前」の風景

はじめに携帯電話です。おそらくこの会場にいる殆どの人が携帯電話を持っていると思いますが、今、全国でどれくらいの数があると思いますか。7,300万台あるそうです。携帯電話はむろん昔からあるものではなくて、最初に世の中に出たのは1985年です(私の今日の話では、基本的に共通暦を使いますが、元号を使い慣れている人は25を足すと共通暦になります。1985年というのは昭和でいえば60年です)。当時、NTTがまだ電電公社とっていた頃に、一般向けに持ち運びできる電話が発売されました。ショルダーホンと呼ばれましたが、その名の通り肩に掛ける電話で、重さが3キロもあったそうです。

3キロといえば赤ちゃんの体重ですよ。

その2年後に現在のモデルに近いものが出来たのですが、それでも重さも大きさも今の3倍以上もありましたから、とてもポケットに入らない。NTTから独立してドコモという会社ができたのは今から10年前ですが、それ以降、どんなに急ピッチでケータイが普及していったのかはあなた方のほうがよく知っているでしょう。この国の人口は1億3千万人に少し足りないぐらいですが、65歳以上と10歳以下の子どもを除外すると、残りの活動的な世代は約9千万人ぐらいです。その中で7,300万人が携帯電話を持っている。猫も杓子もという云い方は問題かもしれませんが、数字の上では持たない人の方が明らかに例外になりつつある。

「あ、すごいんだ、日本は豊かな国なんだ」と思って下さってもいいのですが、私がお話したいのは、街の中にケータイが広がったことは誰だって気が付くのですが、その反対に、同じ時期に消えていったものについてもきっちり見ておく必要があるのではないか、ということです。

たとえば、携帯電話が普及したおかげでテレホンカードがなくなってきました。一時は年間に4億枚くらい発行されていたものが、最近では5分の1以下にまで落ち込

んでいます。それから、気がついてみると公衆電話の数も少なくなりましたね。すでに全国で15万台が撤去されたそうです。もう一つ、これは私のような世代にはなくなって寂しいと思っているのですが、鉄道の主要な駅には必ずあった「伝言板」がなくなってしまいました。

私たちは今、目の前にあるものすべてを動かしがたい風景として感じていますが、実はそうではなくて、世の中全体が刻々と移り変わってきて現在のようになった、ということです。そのことは言い替えれば、それらはこれからも変化していく、ということになります。そんなこと当たり前や、と思いますか。そう思う人はそのことを忘れないでほしいと思うのです。いつの時代も、そのままの形で永遠に続くのではなくて、変わっていく可能性を内側に秘めて世の中は存在している、ということになります。

今日はいくつかバラバラな話をしますが、それらをまとめた結論を最初に言いますと、どんな問題を考える場合にも、そのように、目の前にある見えているものがすべてであるように考えがちだけれども、それらは大きな過去の歴史を引きずって、そして未来にむけた大きな時間の経過の中で変わっていくということ。

もう一つは空間の中でも人々は大きく変化します。地

球上のさまざまな場所、日本の中のさまざまな場所に異なる文化がある。これも当たり前ですが、だから、たまたま自分がいる場所のその周囲にあるものを絶対化したり、それを基準にものを考えたりしないようにしたい、というのがお話ししたいテーマの二つめです。

時間の変化、空間の変化の中で、物事は異なるということを押さえて、それを頭の引き出しの中で整理しながらものを考えないと、世の中には情報が一杯ありすぎて何が何だかわからなくなります。

おまけに技術の進歩はアレヨ・アレヨという間ですから、「写メール」というCMで知られているように携帯電話にデジタルカメラがついたかと思えば、それを受けて、大阪府警が新しいシステムを発足させたという記事が数日前の新聞に載っていました。たとえば轢き逃げ事件があった場合に、被害者やその近くにいた人が、「写メール」でその轢き逃げしたクルマを撮ってそのまま警察に送る。「画像110番」というのだそうですが、そういうサービスシステムが大阪府警で4月1日から始まったのだそうです。そのうち全国化するでしょう。

でもこうしたやり方が可能であれば、次には「この顔にピンときたら110番」という警察のPRが頭の中に残っていると、街を歩いている時に、すれ違った人を見て

「あれ、この人、あの容疑者と違うかな。犯人と違うかな」とパッと写して警察に通報することも場合によってはあるかもしれませんが。私自身はそうした振る舞い方が一般化するのはいは好ましいとは思いませんが、そうした事態も予想できないわけではない。

それはともかく、このように今や携帯電話は大繁盛ですから、普通に考えるとその会社は儲かっているはずですよ。ところがつい最近、「NTT東西の社員14万人のうち、設備、保守業務に携わる10万人が各地に新設される業務委託会社に転籍、出向する。51歳以上の55,000人は一端退職し、15～30%賃下げで再雇用される」という発表が行われました。儲かっているはずのNTTがすごい合理化をしている。51歳というと、あなた方のお父さんの世代ではないですか？ 私たちの周辺では、右を見ても左を見ても「ケータイ」という風景の裏側で、その企業に働く「51歳」という働き盛りの人たちが、リストラされたり賃下げされたりしている。そうしたことを複眼的に見ていく必要があるのではないかというのが、携帯電話にかかわる話です。

●マクドナルド「成功」の秘密

二つ目はマクドナルドの話です。このマクドナルドが

ハンバーガーを売っている店であることを知らない人は
いません。でも日本でマクドナルドがデビューしたのは
1971年で、最初はわずか5店から出発したのです。そ
れが皆さんが生まれた1984年～85年の頃には全国で400
店となり、現在では約4,000店。30年間で800倍に伸び
たことになります。一昨年の集計では、1年間に12億5
千万個のハンバーガーが売れたのだそうです。この国の
人たちが赤ちゃんからお婆ちゃんまで、誰もが1年間に
10個のハンバーガーを食べた計算になります。むろんマ
クドナルド以外にもハンバーガーのお店はありますから、
長い間、米のご飯とお味噌汁を食生活の基本にしてきた
民族が、すごいスピードでハンバーガーに慣れ親しんで
いったことが分かります。

ところでマクドナルドがそんなに発展した大きな秘密
は何でしょう？ あの店は全国どこへ行っても店の形が
同じ、店員の挨拶の仕方が同じ、ハンバーガーもポテト
も同じ味で同じ価格です。それらを含めて材料から調味
料に至るまで全部で2万数千件のマニュアルが作られて
いるそうですが、30年間に800倍に伸びた企業の秘密は
実は徹底したマニュアル化にあったと云われています。

そこで考えてみたいのですが、確かに「マニュアル」
は便利です。初心者でも短期間に要領を覚えて、それな

りにマスターすることができる。能率もあがるでしょう。あれこれ考えたり悩んだりする必要がないし、失敗も少なくすることができます。けれども、「マニュアル」は、同時に、それを使う人たちが自分の頭でものを考えて、その場その場で独自に判断をすることを妨げる役割もする、という側面があります。言い替えれば、私たちが失敗をすることから学んで、自分の力を養っていく上では、「マニュアル」の存在は必ずしもプラスにならないという言い方もできるわけです。

ところが、あなた方が学んできた高校までの教育の現場でも、受験をクリアするための「マニュアル」が幅をきかせて、それを早く覚えた者が「優等生」と見なされるということがあったのではありませんか。その中身を自分の力で習得するのではなく、与えられた「マニュアル」を疑わないでそのままオウム返しに答える。その方が「成績」がよくなって偏差値も上がる、というシステムが今日の学校教育の中で支配的な位置を占めているようです。その結果、特に「優等生」と呼ばれる人たちが自由にものを考えられなくなっているのではないか。臨機応変に対応する力を低下させているのではないか、そんな気がします。私は、神戸の大震災の時に、おそらく学校時代は「優等生」であったと思われる人が硬直した

対応をした事例を見て、そうした感想を持ちました。

それは次のような場面でした。もし皆さんがその場にいたら、どんなふうに対応するでしょうか。まだ多くの人が神戸の大震災のことを覚えていると思いますが、あれは1995年1月17日、寒い冬の日でした。その日の晩から、家を失った人たちは各地の体育館に避難してそこで寝泊まりしましたが、云うまでもなく体育館の床は木の板で出来ています。その木のフロアに直接布団を敷いて、お年寄りたちも皆そこに寝ていました。

テレビでその光景を見た岡山県のある畳屋さんが「寒いやろな、冷えるやろな」と同情して、仲間の畳屋さんにも余っている畳をカンパしてもらい、大きなトラックに積んで神戸に飛んできたわけです。そして到着した避難所の体育館で「せめて床の上に畳を敷いたら、少しは寒さがマシになるのではないか。これを使ってほしい」と申し出たそうです。ところが、その時に応対した神戸市の職員はどう答えたか。「いや、その畳を受け取れない」と云ったというのです。体育館に詰めていた神戸市の職員は避難していた人たちの最も身近にいるわけですから、もちろんそこで過ごしている人たちの寒さも辛さも知っていた筈です。現に一番の被害者であるおじいさん、おばあさんを目の前に見ているはずです。 ところ

が岡山の畳屋さんの申し出を断ったんです。どうしてでしょう？ その時の理屈が人権、差別の問題とかわかるのですが、彼はこういう言い方をした。「畳屋さんの好意は嬉しいけれど、しかしその畳は神戸中の体育館に配る量がありますか？」。あるわけがない。「持ってきてもらった畳をここだけに敷くと、隣の体育館に避難している人たちとの間に格差が生じて、結果として差別になる。隣の体育館の人から『なんで私たちに畳がないねん』と言われた時、市の職員としては答えようがない。全部の体育館に敷けるだけの畳があれば受けとりますが、この体育館だけ敷くわけにいかない。どうぞお持ち帰りください」と云ったというのです。

さあ、こういう場合、皆さんだったらどう答えますか？

大きな体育館は暖房を入れても効きません。木の床は下からしんしん冷える。そういう空間です。せめて畳を敷いて、少しでも寒さがしのげたら、という畳屋さんの気持ちは間違っていますか？ 間違っていない。畳を提供するのも全くの善意です。ところが、市の職員は「この体育館だけいい目を見ると、隣の体育館から文句が出る。不公平だ。差別が生ずる。平等でなくなる」という考えで断ったわけです。私から云わせれば、平等とか差別という問題を、紙の上の理屈でしか学んでこな

かった典型的な「マニュアル」人間、マニュアル型の優等生だと思いますが、さて、皆さんの中には将来、公務員になりたいという希望を持っている人もいますが、公務員法で「全体の奉仕者」であるとされている公務員として、この場合の神戸市の職員はどこが間違っていたか、考えてみてください。

別の答えがあると思いますし、私なりの答え方も用意していますが、ここでは言わないことにします。この中の公務員志望者が実際にどこかの役場に就職できた場合、そして地域の住民が苦しんでいる局面に立ち会った時、自分ならどう答えるか、一度、頭の中でシミュレーションしてみてください。マニュアル人間がマニュアル通りに考えると、平等や差別の問題はそんな答えになってしまう。つまり、今日の時代の「優等生」たちは臨機応変に考えることをもっとも不得手にしている、という話ですが、これでは日本の先行きが明るいとは云えなくなるでしょう。

云うまでもなく私たちの国は物質的にはきわめて「豊か」です。昨年秋以来、私たちは毎日のようにアフガニスタンの戦争をテレビで見てきましたが、国連などの発表では、日本のように世界で一番豊かな国と、アフガニスタンのように一番貧しい国との間の格差はなんと75

倍もあるのだそうです。しかし、「75倍」と云われても、正直に言ってピンとこないですね。どんなふうに考えればいいのか。

こういう時は何か具体的なものに換算すればいいのですが、分かりやすく云えば、皆さんは朝、昼、晩の食費にどれほどかかりますか？ その合計を考えてみてください。「75倍」ということは、日本で使っている食費の1日分が、貧しい国では実は75日分になる。2ヵ月半の分になるということです。それほど格差がある。

私たちは年に12億個のハンバーガーを食べ、農林水産省の発表では、1家族あたり年間に30キログラムの残飯を出している。私たちはそういう国に生まれて、暮らしています。「豊かな国」では多くの企業が、マクドナルドのようにマニュアル通りにモノを製造してマニュアル通りに販売して、高度成長を実現して大成功を収めた。しかしその隣りで私たちは、マニュアル通りに差別を考え、マニュアル通りに人権を考えることにも慣れすぎてきたのではないか。それが震災の後の豊屋さんの人間的な申し出を断る側の発想にまで繋がっているとすれば、やはり、誰かが「このままのやり方で良いのか」と疑う必要があると思うのです。

●希望のない国？

この国の青少年について気になる新聞記事を見つけました。財団法人日本青少年研究所が日本と韓国とアメリカとフランスで同じ意識調査をしています。「新千年生活と意識にかかわる国際調査」というのですが、その中に、「21世紀は人類にとって希望に満ちた社会になるか」という問いがありました。

日本の青少年の62%は、それに対して「そうは思わない」と答えています。この「豊かな国」に生まれて、写メールもマクドナルドも何でもある時代に、「21世紀に未来がない」と云うのです。皆さんはよその国も同じだろうと思っていませんか？

しかし調査では、アメリカでは86%、韓国では71%、フランスでは64%が「21世紀に未来がある」と答えています。他の3ヶ国の青少年たちが「21世紀に未来がある」と答えている時、日本の若者たちは逆に「21世紀には未来がない」と答えている。どうしてだと思いますか？

突き放していえば、「21世紀」に「未来がある」かどうか、という問題は実際にはかなり難しい「問い」だと私も思います。楽観的になれない要素は世界的に見てもたくさんあります。けれども、日本の青年たちが、自分たちの未来に希望が持てないまま日々の生活を送ってい

るとすれば、それはシビアな現実を身体一杯に受けとめて、それを見据えた結果としての思いであるのかどうか。それは、もしかしたら無気力の別の表現ではないか、という疑いが私にはあります。

「絶望するためには感情的なままでもいいが、希望を持つためには理性的であらねばならない」という言葉がありますが、皆さんも、どうすれば未来社会に希望を持てるか、そのことを4年間の間にぜひ考えてほしいと思います。東京大学大学院の上野千鶴子さんは、ある短いエッセイに「今はピカピカ、お先真っ暗」というタイトルをつけたことがあります。私たちは、自分のためにも次の世代のためにも「お先真っ暗」であっては困るわけです。どこかに「光」を見つけて、「お先真っ暗」でない時代にするためにはどうしたらいいか。それがこの時代に・この国に・住む者の一番大きなテーマではないかと思うのです。

ところで、なぜ日本の青少年に未来がないのか。この責任の多くは教育にあると私は考えています。皆さんの中にも「大学受験」ということが小さい時から頭の隅にあって、中学では高校、高校では大学と、常に一つ上の受験のために何でも「我慢しなさい」と云われ続け、それが18年間の目に見えない壁になってきた、という人も

少なくないと思います。一方でマジメな先生から「差別をしたらあかん。人権は大事にせんとあかん」と教えられる。他方で、自分の心の中では「何言うてるねん。差別なんかなくなるかいな。誰でも自分のエエことばっかりしてるねん」という思いがある。足の引っ張りあいをして「自分だけいい学校に行きたい」「いいところに就職したい」という思いがホンネとしてありながら、それを隠して「いい子」にしてきた。

そうした分裂を子どもたちにもたらしてきたのは、殆どの学校で偏差値教育と人権教育を無批判に共存させてきたからです。同じ教師が、一方で差別を禁じ、他方で事実として差別を奨励してきた。そういう教育が行われてきた上で、東京大学、京都大学を頂点として、そこから順番に1点刻みで「カシコ」の差、「バカ」の差がつけられる。これでは頂点に登り詰めた人以外は、誰もが自分と自分の未来を貶めて考えることになるのは当然でしょう。

そこで考えてほしいのですが、「マニュアルを覚えた人が賢い」と評価されるやり方に対して大企業が今、大きな反省をしているという事実です。皆さんの多くも4年後には就職するでしょうから記憶しておいてほしいのですが、大企業では、文房具屋で売っている履歴書では

なく、その会社独自の形式で履歴書を作っている所が少なくありません。その中に、最近是最終学歴の学校名を記入する欄がないものが増えてきているそうです。

ということは、4年後のあなた方が「花園大学」卒業と書きたいのに書く欄がない、ということになります。そして、そのことに一番大きなショックを受けているのは、世間から「カシコ」と言われ、自分も「カシコ」だと思っている偏差値上位の有名大学の人たちです。例えば「東京大学」卒業の人たちは、特に大きな文字で学歴欄に「東京大学」と書きたいのではないか、と私は勝手に想像するのですが、志望した企業の社用紙(最近ではホームページ上でのエントリー・シートに記入する例が多いようですが)には単に「4年制大学」卒業としか書けない、ということになります。

最初にこの方式を開発したのはソニーです。ソニーは今から20年近く前にこれを最初に発案し、その後、多くの会社が「ソニー方式」に同調してきました。最近ではトヨタ・日立、オリックス、キャノン、第一生命、阪急電車など多くの有名企業の社用紙にはその欄がなくなってきました。どういうことだと思いますか？

ソニーという会社は、以前は東京通信工業と言いました。今や世界の「SONY」ですが、もともとは後発メー

カーです。ナショナル、日立といった先発の電機メーカーと熾烈な市場競争をしなければならない、ということで、そのために「カシコ」の学生を求めて偏差値の高い大学からたくさんの人を入社させた。ところが、結果からいえば、その人たちが役に立たない。なぜ役に立たないかといえば、有名大学の「優等生」たちはマニュアル人間ばかりが多くて、上司に指示されたことはするが、自らクリエイティブな仕事をすることができない。他人の考えないことを思いついたりする能力が、現行の教育システムで「優等生」になる人たちにはない、ということに気がつくわけです。

それ以降、ソニーは会社の履歴書から学校名や、職種によっては最終学歴そのものを記入する欄をなくしてしまったのだそうです。ソニーの創業者の一人である盛田昭夫氏はすでに1960年代の半ばに『学歴無用論』（朝日新聞社。現在は「朝日文庫」版）という本を出していますが、そうしたやり方でユニークな人材を集め、その結果、ソニーがあんなに急成長していった。つまり、クリエイティブな能力、柔軟な発想、そうした才能はマニュアルばかりが得意の「優等生」たちに求めることはできない、ということ、今や日本を代表する企業がその体験の中で証明したということができる。

そういう大きな曲がり角の中に今、時代の転換を経験する現場に今、皆さんが居合わせていることを考えてほしいと思います。4年後、卒業する時、これまでと同じやり方で勉強し、言われたことを覚えて答案用紙に書いて、いい成績で卒業したいと思っている人がいたら、「それはちょっと違うよ」と云ってあげたいと思います。

私の授業でも「先生、大事なことは黒板に書いてください」という学生がいたりします。あることを黒板に書くとき「先生、それはノートしなければいけませんか？」と質問する学生がいます。私の経験では、成績のいい学生ほどそういう言い方をします。そこで私は云うのです。「大学は高校の勉強の延長をする所ではないんですよ。高校までの勉強はモノを覚えればよかった。大学ではモノを考えて、自分で判断できる力をつけるための学習をするんです」と。目の前にある見慣れた風景を、それまでと違った角度から見直してみる。そういうことを意識して訓練するのが大学でのベンチャーだと理解しておいて下さい。

●「教え子たち」の発見

M君という私の教え子の一人が教育実習に行きました。普通は母校の中学や高校に行きます。M君は小学校の先

生になりたくて通信教育で別の単位をとって小学校へ実習に行ったのですが、そこで教えた生徒が、作文に「スズメは死にません」と書いたのだそうです。「スズメは死なない？ どういうことかな」と思ってその子と話をすると、「スズメの死んだのを見たことがない」と言う。そう云われて彼はビックリするのです。

皆さんはどうですか、スズメの死んだのを見たことがありますか？ これだけたくさんスズメがいるわけですから、街のあちこちにスズメの死体が落ちていてもいいわけですが、滅多に見ることがない。鳥はどこで死んでいるんでしょうか。こんなふうに見慣れた風景の中に「エッ」と思うことが一杯あります。「スズメは死にません」という中身は間違っていますが、しかしその小学生が「スズメの死体を見たことがない」という素朴な認識は、私たちの日常的な常識や感覚をハッとさせる。私たちにとってあたりまえのことが、別の角度から見ると全くあたりまえではない、そういう風景が世の中には一杯あります。

もう一人の別の教え子の体験も紹介しましょう。私はこの大学で教える前に天理大学でも教えていたのですが、そこのインドネシア学科を卒業したFさんが今は小学校の先生をしています。まだFさんが大学生だった頃、私

は彼女に「どうしてインドネシア学科を選んだの?」と聞いたことがあるのですが、その時の答えは「私の成績ではインドネシア学科しか入れなかったんですよ」と半ば苦笑いして言うわけです。彼女が教員になった時、大阪府の教育委員会に申請して、インドネシアの小学校で1年間、現地の教育を視察するという研修を受けることができました。

その時に彼女から繰り返しメールをもらいました。昔だったら手紙のやりとりは航空便ですると決まっていますが、今はパソコンの前に座るだけで、ほとんどリアルタイムの感覚でメールが交換できます。その点では本当に便利ですが、その中でFさんはびっくりすることを書いてきたわけです。

彼女が研修に行ったのはロンボク島という小さな島の小学校なのですが、最初に大きなカルチャーショックを受けたのは「雲古」のことでした。インドネシアでも都市部のホテルに行くとトイレトペーパーがあるので日本と変わらないのですが、彼女が滞在した所では紙でお尻を拭くという習慣がない。彼女はびっくりして「どうしているのか」と聞いた。なかなか聞きにくい話ですね。私たちは普段、ウンコは毎日しますから話題にのぼってもいいわけですが、公の場所ではしないことになってい

ます。だから彼女は子どもに聞きました。するとその子は「先生、お尻は手で拭くんだよ」「エッ、どうして。手が汚れるじゃない」「その手は水で洗えばいいでしょう」。

お尻は左手で拭いて手を洗うのがここのやり方だと教えてもらう。びっくりしている彼女に、子どもは「エッ、日本は違うの?」「日本は違うよ」「日本はどうしているの?」「日本は紙で拭いているよ」。すると、現地のその子どもは「え、紙で拭くなんて汚いなあ」と答えたというのです。

Fさんは「手で拭くのが汚い」と思う。向こうの子どもは「紙で拭くのが汚い」と言う。この落差は何でしょう。インドネシアと日本は飛行機でならわずか6~7時間の距離にありながら、日本人である私たちは手で拭くことに生理的な抵抗感がある。「その手は洗えばきれいになるよ」と言われても、理屈ではそうかもしれないが、なかなか踏み切れない。でも結果から言えば、彼女は1年間そうしたわけです。

そのことをメールで言ってきました。日本では、最近ウォッシュレットが普及して、お湯でお尻を洗ってくれたりする。手も汚さない。でも昔々の日本は紙は貴重品だったはずです。私は奈良の出身なので遺跡発掘のニュー

スをよく新聞で見ますが、そうした所から多く木簡が出てきます。トイレットペーパーで拭くような習慣は日本の歴史のいつ頃から始まったのかと考えると、長い間、紙は貴重品だった筈ですから、そんなに昔からではないと気がつくわけです。

もしかしたら日本だって一般民衆は手で拭いていたかもしれない。紙で拭くようになったのは何時頃からだろうと、図書館へ行って調べてみると、『トイレの考古学』（東京美術）という本に日本のトイレの歴史が書いてありました。その中で金田一京助さんが「日本では、昔はフキの葉っぱでお尻を拭いていた」と書いています。なるほど。ちょっとごわごわするけど、自然のものだし、それで苦痛なくトイレの問題が解決したのかな。

それだけではなくて、金田一さんは、フキという植物の名前は「フク」から来ているのだという。「お尻を拭く」が「フキ」という名前の語源になっているなんて想像もつきませんでした。が、学問はそんな形で、私たちの歴史を鏡に映してくれる役割もするのだと気付かされます。

ところで、Fさんがエライのは、「お尻を手で拭くななんて遅れてるッ」とは思わなかったことです。紙で拭く私たちの方が文化的で、向こうが原始的だと決めつけて

いたら、彼女は毎日毎日が苦痛で1年間そこで暮らすことはとても出来なかったでしょう。彼女は恐る恐る「手で拭」いてみて、「慣れたら何ということはない」という感想を書いています。そればかりか、教えてくれた先の子どもに「右手の方が上手に拭けると思うのだけれど」と聞き直すと、たちどころに「左手でなくてはダメだよ」と諭されている。その時の彼女の困った顔はたぶんとても美しかったに違いないと私は想像しています。

●類人猿がレッドリストに

ところで、私たちはトイレットペーパーばかりでなく、紙をふんだんに使って生活しています。日本の紙の生産量、消費量はアメリカに次いで世界で2番目です。

そのことを分かりやすく知ってもらうために、皆さんの世代なら誰でも知っている「少年ジャンプ」「少年マガジン」「少年サンデー」というマンガ週刊誌を例に出してみたいと思います。それ以外にも「コロコロコミック」や「月刊少年マガジン」などもありますが、主な週刊の少年マンガ誌だけで1000万部以上も発行されています。毎週・毎週1000万部です。つまり1年間で5億部。

分厚さは各種いろいろありますが、平均すると一冊が500グラムあります。従って、500グラム×5億部×50

週で、1年間の紙の総量になるのですが、これがイコール25万トンになる。週刊の少年マンガ誌を発行するだけで1年間に25万トンの紙がいるというわけです。で、その紙は何から作られますか？

紙はある種の草からも作ることができますが、ほとんどは木からです。では25万トンの紙を生産するのにどれくらいの木が必要か。オイルショックの時の通産省の説明では「1トンの紙をつくるのに立木20本がいる」。とすれば、25万トンの紙をつくるのに500万本の木がいるという計算になります。1年間、少年マンガ雑誌を発行するのにそれだけの木が必要になる。それは日本の山の木を伐ってのか？

むろん日本の木も混じっているでしょうが、日本はオーストラリアやブラジルや、そしてインドネシアを含めた他のさまざまな国に行って森林を伐採し、それを輸入して紙の原料にしているのです。繰り返しますが、日本の紙の生産量は世界のナンバー2です。

但し、数字が一人歩きをしてはいけないので急いで訂正しておきますが、500万本の木がないと少年マンガ誌が発行できないという、これはウソになります。読んでいる人は知っているように、あれらの雑誌はどの頁をみても色がついています。それは再生紙だからです。再

生紙は真っ白い紙と印刷された紙を混ぜ合わせて作りますから、繰り返し再生するとだんだん黒ずんでくる。それで色素を入れて青い紙や赤い紙や黄色い紙にするわけです。ですから、毎年毎年、500万本の木を伐って少年マンガ雑誌を発行しているわけではない。計算上はそれくらいの分量のパルプを使わないと少年マンガ誌が発行できない、という関係を知ってほしいということです。

むろんマンガ雑誌は一例にすぎませんから、それ以外にも私たちはトイレットペーパーを含めて、毎日、沢山の紙を使っています。しかし、ちょっと立ち止まって考えてみると、マンガ誌だけで500万本分になるとすれば、いかに再生紙を使うとはいえ、次から次へ森林を伐採して大丈夫なのか、ということが気になるでしょう。

そこで思い出してほしいのですが、皆さんは中学校の理科の時間に、植物には炭酸同化作用があって、炭酸ガスを吸って酸素を出してくれる、ということを学んだ筈です。とすれば、多くの木を切り倒せば、明らかにそのぶん酸素の供給量が減るということになる。なんて云われても、だからといって、私たちは酸素不足で息苦しいなどと思ったことはないですよ。だから、実際には伐採された後に植林されていることもあって、現時点ではまだそんなに極端な話ではないのですが、しかし一つだ

け極端な話がすでに出てきています。ここでオランウータンの話につながるのです。

「オラン」というのは現地の言葉で「人」という意味で、「ウータン」は「森」です。これは大学でインドネシア語を学んだFさんに教えてもらったことです。つまり、オランウータンは「森の人」という意味です。動物園で実物を見た人もいるでしょう。実物は知らなくても写真では見たことがあると思います。でも、これまで「オランウータンは猿」だろうという印象も持っていませんでしたか？

実はオランウータンは猿ではありません。尻尾がありません。2本足で立って歩きます。オランウータンは猿と人間の間で分類される類人猿なのです。現地の人たちが「森の人」と呼んでいるように、オランウータンは主にインドネシア各地の森に生息している樹上生活者です。木の上で生活していて、滅多に地上には降りてこないのだそうです。

すると、ここで先の話に戻るのですが、たくさん紙をつくるためにたくさんの木を伐り倒すと、当然の成り行きとして彼らの生活する場がなくなる、という関係に実際になっていることが国際的な自然保護団体から報告されています。オランウータンは今、絶滅の危機に瀕して

いるそうです。もう何年も前からレッドリストの上位に上げられている。

でも、別にオランウータンが地球上からいなくなっても私たちの生活に困らない、という人もいるかもしれませんが、オランウータンは私たちのすぐ隣にいる類人猿です。彼らが絶滅の危機に瀕していることは、それに類する、それにつながる多くの動物が生存の危機に瀕する時代がそう遠くない日に来るかもしれないということです。そうした生存の危機と隣り合わせであることを、知識のある私たち、判断力のある私たちは考えることができる筈です。これはもちろん一つの比喩として云うのですが、少年マンガ誌を読んで笑いころげている顔と、行き場を失ったオランウータンの親子が悲しんでいる顔を、その両方を合せ鏡で見る、そういう眼が必要ではないかと思います。

●バカではないバカ

皆さんは大学に勉強するために来ましたか？ 兵庫県のある私立大学の先生が最初の授業で「君たちは何をしたいと思って大学へ来たのか？」と聞いたそうです。学生たちは口々に「大学へ行ったら遊べると聞いた」とか「アルバイトをしたい」「アルバイトで金を貯めて中古で

もいいから車を買いたい」「海外旅行がしたい」「4年間で結婚相手を見つけたい」等々と正直に答えた。先生の方は、予想してたとはいえ「大学へ来て勉強したいという人はいないのか」と嘆いたといひます。

でも、それはそうなんです。皆さんはこれまで「勉強せえ、勉強せえ」とばかり言われてきた。正直言ってこれ以上勉強するのはいやだと思ひ。偏差値で輪切りにされてきた発想にまた閉じ込められてしまう。そういう堅苦しいイメージがあるから「勉強なんかしたくない」。とりあえず大学へ入れたら、これまでの親の干渉を断ち切って思い切り遊びたい。クラブも活動したい。アルバイトをして自由に使えるカネがほしい、という大学生活のイメージを抱いている人はかなり多くいるだろうと思ひます。

ここで人気テレビ番組の「探偵ナイトスクープ」の話をしてします。こんな本が出ています。『全国アホバカ分布考』（太田出版）という分厚い本です。著書の松本修さんは「探偵ナイトスクープ」のプロデューサーです。視聴者からのハガキの注文に「探偵」たちが応えていくのが番組のウリですが、そこへこんなハガキが来ました。「私の女房は東京出身で、私は大阪出身です。女房と喧嘩をすると、女房は私に『バカ』と言ひ、私は女房に

『アホ』と言います。私は『バカ』と言われるき傷つく。女房は『アホ』と言われると傷つくらしい。東京では『バカ』といい、大阪では『アホ』という。どこかにその境界線があると思いますが、それはどこでしょう？」という質問でした。

そのハガキが番組で採り上げられて、北野誠という「探偵」がそのハガキを持って、東京と大阪の間のどこかにあるはずの「バカ」と「アホ」の境界線を探しに出かける、という番組が作られたわけです。東京から次々と新幹線の主な駅で降りて「このあたりではどういいますか？」と出会った人に尋ねて歩く。

ここは「バカ」だ。ここは「バカ」だと、最初のうちは「バカ」が続いて、どこかで「アホ」になることを期待して訊いていったら、途中からいきなり「タワケ」になった。名古屋は「タワケ」です。そして、米原を過ぎてようやく「アホ」になる。

ところがこの番組で放映されると、全国から大きな反響があって、北海道や青森からは「うちは、ハンカクサイといいます」。宮城や福島からは「バカ」。茨城からは「ごしゃっぺ」。石川では「ダラ」。福井は「あや」「ぬくて」。兵庫では「あはぁ」。徳島は「ほれえ」。岡山は「あんごう」。島根は「だらず」。佐賀では「ばか」「ふう

け」。鹿児島では「バカ」。沖縄では「ふらふうじ」という視聴者からの手紙が殺到した。番組担当者はびっくりするわけですね。

それで彼らは、もっと詳しくこの問題を調べられないか、と考へて、全国に3,300ある市町村の教育委員会に手紙を出した。「おたくではバカとかアホという言葉についてどういう表現が使われていますか？」と。

返ってきた言葉を地図の上に落とすと、これが柳田国男(民俗学者)のいう「蝸牛考」のような分布図ができあがった。つまり、古代の都であった京都を中心にして、同心円状に波を描いて同じ言葉が東西に広がっているという地図です。東の東京だけではなく西の九州でも「バカ」という。

そればかりではなく、どうやら「バカ」という言葉は、世間で云われているような「能力の劣る者」という意味ではないらしいということも分かってきた。つまり、試験で30点しかとれなかったから、「バカやな」「アホやな」という言い方が間違いだということです。

「バカ」をワープロで変換すると「馬鹿」と出てくる。これが間違いだという。著者の松本さんは「バカ」の語源を遡って中国は唐の時代の有名な白楽天の詩にまでたどりつくのですが、結論からいえば、「バカ」は「馬鹿」

ではなくて「馬家」が正しい。「馬」は苗字です。馬さんの家の人。その「馬家の人」は大変賢くて、出世をした。大きな権力を持ち、お金持ちになって大きな家に住んだ。当然、周りの人たちから羨ましがられた。ところが、そのように出世した「馬」さんは「俺は偉いんだ」と奢り高ぶり、やがて人々から嫌われ、その結果、没落した。昨日までの屋敷には雑草が生い茂って今や見る影もない。それ以来、「俺は偉いんだ」と奢り高ぶって、自業自得で落ちぶれた人のことを「バカ」というようになった、ということです。これがエエ加減な話でないのは、こうした松本さんの研究が認められて、日本国語学会の研究集会にゲストスピーカーとして招かれたり、京都大学の国語学者が「これからは松本説が辞書に載せられるべきだ」と発言していることから分かるでしょう。

●4年間を転機にするために

私たちがこれまで当たり前だと見てきた、人々が疑わずに「あれは立派や」「これは賢い」と云われてきた、そうしたことをもう一度疑い始め、周りの価値基準に追随するのではなく自分なりの価値基準をもって、自分の生き方を選んでいく。人との関係を大事にする中で、大きな時間の中で、空間の中で、変わっていく流れの中で、

自分自身が言葉の正しい意味で賢くなっていく。そういう人生の選択の仕方をする大きなチャンスが、この4年間、皆さんに与えられていると思います。

大学へくる人たちは多くなっているとはいえ、比率は同じ世代の人の48%です。二人に一人です。残りの半分は大学に来ていません。皆さんの中には大きな出世、成功に向けたエスカレータに上るつもりで大学にきている人がいるかもしれませんが、今は大きな企業のトップにまで登り詰めた人たちが、次から次へテレビカメラの前で頭を下げて謝罪会見をする時代です。これまでのやり方、これまでの価値観、これまでの常識が根底から揺らいでいる時代に、皆さんは大学へ入ってこられたわけです。つまり、エスカレーターの行き止まりがもしかしたら雲の中で消えているという時代です。

皆さん、4年後の風景を想像してみてください。その時、あなた方の周りでは冬季オリンピックのニュースが一段落し、今年ほどではないとしても、サッカーのワールドカップの話題が飛び跳ねているでしょう。この京都では次の京都府知事選が行われている筈です。4年ごとに行われる行事が卒業を控えたあなた方の前に繰り返される。

しかし、それを取り巻く風景は大きく変わっているに

違いがないのです。その時、自分がどう変わっているか。昨日の入学式とは違う新しい自分に生まれて変わっているか。

この4年間を、これまでの価値観とは違うものを持って、自立する一つの大きな根拠にするための何かを手に入れる時間にしてください。友だちを発見する。その友だちがインドネシアに行って、お尻を手で拭いていると聞いた時には、それをバカにしたり「汚いなあ」と言うのではなく、そういう文化の違いがあることを発見する。そういう異なる文化に向き合うエネルギーと勇気を持つるように。これまでの歴史を見ても、大きな時代の変わり目には、まず若い人たちが新しい価値観を創造し、それを受け入れ、やがて世の中全体を変えていくそうした流れが生みだされてきたのでした。ぜひそういう役割を自覚する4年間、そういう自分を準備する4年間にしてくれたらと思います。

ある意味では、自分が「変わる」のは怖いことです。みんなと「違う」ことを言うのも怖いことです。それはいま皆さんの前で偉そうに喋っている私にしても同じことです。

でも、例え少しでも、出来合いのマニュアルをはみ出して、自分のオリジナルなものを作ることなしに、自分

の人生を終えたくないという気持は、私の中にもまだ消えていません。これからの4年間、あなた方とこの大学のキャンパスで何度もお会いすると思いますが、そういう思いを伝え続けることが私の仕事だと考えています。

長い時間と広い空間の中で、これまでの自分と違うものを発見し、違うものを取り入れることで自分を豊かにする、そういう出会いができることをお互いに期待しながら、私の話を終えたいと思います。ありがとうございました。

司会 自分と異なるものの発見、違いのあるものを高く評価していく、同じところに固まっていない視点を持つ。我々の目の前にあるのは、わからないことばかりだということ。我々教師はわかったところまで話をする。「この先はわからない、一緒に考えて」というのが大学の授業です。これまでは答えがわかっているところに人より早く到達するというテクニックを学んできたと思いますが、そういう勉強の仕方に固執している人は大学の授業が辛くなります。自分でわからない問題を見つけ、わかるためにはどうすればいいかということが、これからの勉強の中心になります。その中で人権の問題は重要な要素を構成していると思います。そういうことに問題意識

を持たれたら人権教育センターの研究者になっている先生方に話を持ちかけてもらいたいと思います。これまでの同和教育で経験してきたものとは違う人権教育が本学では行われています。

それではこれで閉会にいたします。